

「宗教2世」報道量・報道内容調査

社会調査支援機構チキラボ

調査目的

- ① 安倍氏殺害事件があった2022年7月8日以降、宗教報道や宗教2世報道がどのように行われていたのかを把握する。
- ② 安倍氏殺害事件が起こる2022年7月8日以前、宗教報道や宗教2世報道がどのように行われていたのかを把握する。
- ③ 上記の調査を通じて、「わたしたちが何を議論し、何を議論そびれていたのか」を把握し、今後の議論の糧とする。

旧統一教会に関する新聞報道

安倍氏殺害事件があった2022年7月8日から9月8日までの2ヶ月間。メディアは「旧統一教会」関連のニュースをどれくらい報じたのだろうか。

まず、新聞報道を見ていこう。ここでは、「旧統一教会」関連ワード（家庭連合、統一教会、統一協会、勝共連合、文鮮明）を含む報道頻度について、読売、朝日、毎日、日経、産経という5つの全国紙を対象に調査をした。その結果は以下の通りである。

<図1>

読売新聞：166記事（朝刊：149、夕刊：17）、123,011文字

朝日新聞：232記事（朝刊：202、夕刊：30）、246,074文字

毎日新聞：243記事（朝刊：178、夕刊：65）、233,080文字

日経新聞：144記事（朝刊：124、夕刊：20）、108,111文字

産経新聞：188記事（朝刊：172、夕刊：16）、---,---文字（文字数表示なし）

※新聞ごとにデータベースが異なるため、それなりに条件を合わせるために、「東京版」朝夕刊でカウント

どの新聞も、2ヶ月という短期間に、繰り返し旧統一教会の関連記事を取り扱っていることがわかる。ただし、その度合いは、新聞社によって差がある。

新聞報道のスタンスの違い

記事数の件数として最も多く報じているのは毎日新聞であり、文字数として最も多く報じているのは朝日新聞となっている。逆に、取り上げる頻度が最も少ないのは日経新聞である。ただし日経新聞は、もともと社会問題についての掘り下げを他紙ほど行わず、経済ニュ

ースに特化する傾向がある。その点を考えると、「日経新聞ですら、連日報じるほどの社会問題であった」と言ってもいいだろう。

取り上げる頻度が2番目に少ないのが読売新聞だ。報道量で見れば、記事ベースで朝日の3分の2、文字ベースで朝日の半分程度である。最も売れている全国紙であり、普段は国政の動向を伝えることが多いことを考えると、消極的な姿勢に見える。

産経新聞は、記事数は3番目である。データベース上に文字数を表示しない仕様となっているため、総文字数はわからない。ただ、記事数と文字数がおおむね関連していることを考えれば、「読売以上、朝日以下」の間の文字量であったとみて良さそうだ。

なお、記事の論調はどうか。一般の記事では、各紙ともに、容疑者の発言や、団体との距離を尋ねられた政治家の釈明などを伝えることが多かった。他方で、コラムや社説に目を向けると、それぞれの記事のスタンスが見えてくる。

各紙ともに、旧統一教会が行ってきた霊感商法などについて批判的な論調である点は一致している。

*

他方で、政治との距離についての追求姿勢には、濃淡があるようだ。

朝日新聞は、「自民党と教団 これでは不信は断てぬ」(8/20)、「自民党と教団 広く深い関係 解明せよ」(9/6)などの社説で、政府や政党としての実態調査を強く求めている。毎日新聞もまた、「自民党と旧統一教会 関係の精算を強く求める」(7/27)、「自民の旧統一教会調査 解明には程遠い首相指示」(9/1)などの社説で、実態解明や政治の責任について触れている。

報道量こそ最も少なかった日経新聞も、その主張内容は朝日らと大きく変わらない。「自民は旧統一協会との関係是正を急げ」(8/27)、「自民は調査尽くし自浄作用を」(9/11)といった具合に、政府や与党の対応が不十分であることを批判している。

*

読売新聞は、「旧統一協会問題 高額献金の実態解明が急務だ」(8.11)などで、教会側の問題については追求しつつ、政治との繋がりについては他紙より消極的だ。「首相記者会見 政策遂行し着実に成果出せ」(9/1)の中では、「政治家が関連団体の取材を受けたり、会合に祝辞を贈ったりしたことの追求に終始するのは、理解に苦しむ」とも主張。このように読売は、政治家の関係具合についての取材には、相当に消極的であることが伺える。

産経新聞は「安倍元首相襲撃 テロ事件の肯定を許すな」(8/5)のなかで、「政治家が(…) 団体との関係を断つのは当然である」としつつ、他メディアの追求に対しては批判的だ。コラム「産経抄」では、「関連団体に電報を送ったり、選挙を手伝ってもらっただけの政治家まで重罪人扱いするのは、魔女狩りだろう」(8/1)、「密告の勧めか魔女狩りか／キリシタン摘発のための宗門改めのような行為は、憲法上許されない。やりたければ憲法改正を訴えるがいい」(8/20)といった論調を繰り返していた。

旧統一教会に関するテレビ報道量

では、テレビの報道はどうだったのだろうか。

チキラボでは、事件から二ヶ月間のテレビ報道を調査するため、エム・データ社が保有する「TV メタデータ」をもとに分析した。エム・データ社のデータでは、放送局、放送日時、放送内容、放送時間、出演者などが、比較分析可能なテキストデータおよび数字データとしてアーカイブ化されている。

今回はそのなかから、宗教関連のいくつかのワードを抽出。2022年の7月8日から9月8日までの2ヶ月間で、そのワードに関連した特集が、どの番組で、どのように、どの程度報じていたのかを集計した。対象としたのは、NHK、Eテレ、日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京の7つである。

まず、「旧統一教会系」のワードとして、「家庭連合、統一教会、統一協会、勝共連合、文鮮明」の5つを抽出した。その放送時間は、全局合わせて、2ヶ月間でおよそ215時間であった。内訳は、NHKが約15時間、Eテレが約0時間、日本テレビが約69時間、TBSが約64時間、フジテレビが約19時間、テレビ朝日が48時間、テレビ東京が約1時間であった。

具体的には、どのような番組が特に多かったのだろうか。

<図2> 「旧統一教会」関連ニュースのテレビ報道量（上位20位）

日本テレビ	情報ライブミヤネ屋	39.9
TBS	ゴゴスマ～GOGO! Smile!～	19.7
テレビ朝日	羽鳥慎一モーニングショー	16.1
TBS	ひるおび	15.6
テレビ朝日	大下容子ワイド!スクランブル	9.63
テレビ朝日	スーパーJチャンネル	7.9
フジテレビ	Live News イット!	6.6
TBS	NEWS 23	6.5
日本テレビ	NEWS ZERO	6.3
テレビ朝日	グッド!モーニング	6
日本テレビ	スッキリ	6
TBS	Nスタ	6
フジテレビ	めざまし8	5.5
日本テレビ	newsevery.	4.8
TBS	TBS NEWS	3
テレビ朝日	報道ステーション	3
TBS	サンデー・ジャポン	2.9
TBS	報道特集	2.8

日本テレビ	Z I P !	2.3
日本テレビ	O h a ! 4 N E W S L I V E	2.3

(単位：時間)

放送時間として最も多かったのが「ミヤネ屋」であり、2位以降の番組の倍以上の時間を放送している。日本テレビ系の突出した放送時間の長さは、主に「ミヤネ屋」によってリードされていたことがわかる。

上位には、放送枠そのものが長いワイドショーが名を連ねている。そのように考えると、夜のニュース番組である「NEWS23」や、週に一度の放送であり、特集主義をとっている「報道特集」などが上位に位置付けられる点など、「力の入れ方」は単純に、時間だけで測れるものではない。そこでの報道は、多くが「旧統一教会と政治家との関係」に焦点を当てていた。こうした議題設定が、主にワイドショーによってリードされたことが、数字でも見えてくる。

なお、報道量が少ないことは、そのチャンネルや番組としての関心度が低いことなどを直ちに意味しない。例えばNHKは、ストレートニュースを軸に据える番組が多く、スタジオトークなどで構成する民放テレビとは、番組づくりの仕方が異なっている。NHKは、報道時間の総量は少ないものの、「クローズアップ現代」「時事公論」といった特集主義の番組で取り上げ、養子あっせん疑惑などのスクープも行っている。

それぞれの取材を行う際、その取材方針や反応速度が、それぞれの局の中でどのように定まっていたのか。この辺りは、放送関係者による証言を待ちたい。いずれにしても「旧統一協会」のさまざまな問題は、各局を巻き込む大きなメディアイベントであったことは間違いない。

誰が語り、何が語られたのか

では、テレビでは、どのような議論が行われてきたのか。そのことを定量的に把握するために、ここでは「誰が語り、誰が語られたのか」を見ていこう。

エム・データ社のTVメタデータでは、VTRに映された人物や場所、出演したコメンテーター、パネルなどで紹介されたコメント文の発言者など、誰がどのような形で映し出されたのかを記録している。ここではそのうち、次の4つに着目し、登場コーナーを集計してみよう。

人物：番組に直接的に出演していない、資料的に映像、写真が紹介された有名人。

解説など：コメンテーター。評論家、研究者、解説委員など特定話題について解説する人物。

コメント使用：VTR、中継先で発言した人物

文章など：手紙やFAX、HPでのコメントが使用された人物・団体

これらをカウントしたのが、図の通りである。なお、一つの番組内でも、複数のコーナーに登場していた場合は、その都度のカウントとなる。

<図3>旧統一教会関連報道の登場人物ランキング

	人物	回数	解説など	回数	コメント使用	回数	文章など	
1位	安倍晋三	1014	紀藤正樹	116	下村博文	73	山上徹也	344
2位	文鮮明	333	鈴木エイト	75	萩生田光一	68	田中富広	64
3位	岸田文雄	313	玉川徹	59	生稲晃子	60	岸田文雄	60
4位	韓鶴子	311	田崎史郎	53	山本朋広	58	茂木敏充	40
5位	山上徹也	201	有田芳生	49	鈴木エイト	53	世界平和統一家庭連	32
6位	萩生田光一	135	多田文明	43	井上義行	44	萩生田光一	23
7位	林芳正	128	伊藤惇夫	41	山口広	35	河野太郎	21
8位	高市早苗	112	石塚元章	39	岸田文雄	34	井上義行	20
9位	山際大志郎	109	柳澤秀夫	33	ドナルドトランプ	33	山本朋広	20
10位	加藤勝信	106	櫻井義秀	33	紀藤正樹	22	紀藤正樹	20
11位	岡田直樹	103	野村修也	31	青山繁晴	21	岸信夫	19
12位	茂木敏充	100	橋本五郎	27	前川喜平	19	下村博文	17
13位	寺田稔	97	杉村太蔵	27	河村聡	19	山際大志郎	15
14位	松野博一	90	小西美穂	25	野中厚	17	前川喜平	14
15位	西村明宏	78	山口真由	24	宮本徹	17	韓鶴子	14
16位	葉梨康弘	76	高岡達之	24	原田敦史	17	葉梨康弘	12
17位	岸信夫	75	萩谷麻衣子	22	吉川赳	16	安倍昭恵	11
18位	河野太郎	74	橋下徹	22	有田芳生	16	生稲晃子	11
19位	二之湯智	74	東国原英夫	19	中谷真一	16	二之湯智	11
20位	生稲晃子	68	石原良純	18	アレンウッド	14	泉健太	11

※対象期間中に、テレビに登場した人物など（単位：コーナー数）

図3を見ればわかるように、この時期の報道は、主に「政治家」と「宗教関係者」についてフォーカスしたVTRやパネルが高頻度で紹介されている。それに対し、レギュラーコメンテーターや専門家がコメントするというかっこうになっている。

特に高い頻度で出演していた専門家は、紀藤正樹氏、鈴木エイト氏、多田文明氏、有田芳生氏、櫻井義秀氏、山口広氏らであった。そのほかは、それぞれの番組のレギュラーコメンテーターなどとして出演し続けてきた人物の登場回数が多かった。

出演などとは異なるが、「資料提供」に着目をしてデータ集計も行ってみた。すると、鈴木エイト氏が提供した資料が紹介されたコーナーが146、全国霊感商法対策弁護士連絡会が提供した資料を紹介したコーナーが45あることがわかった。資料は、議題設定のための重要な役割を担う。長年、この問題に取り組んできた弁護士やジャーナリストが、メディアの議題設定を大きくリードしてきたことが読み取れる。

最も言及されたのは、安倍晋三氏であった。これは、メディアイベントの発起点となったことを考えれば、当然と言えるだろう。また、山上容疑者、そして教団リーダーも、被言及

回数が多かった。

そのほかは、旧統一教会との関係が問われたり、説明責任を求められた政治家が、VTR やパネルなどに使用される頻度が高かった。追求に対して政治家が説明を避けたり、説明が二転三転すると、さらに報道頻度は増えていったように思える。

テレビ全体として見れば、「政治と旧統一教会との関係」への追求に、多くの時間が用いられていた。その報道は、量の面でみれば、ワイドショーが圧倒していた。ただし、靈感商法問題に取り組む弁護士らが、コメントや資料提供で目立っていたように、この度のメディアイベント全体を、「政治スキャンダル」の消費であったというまとめはできない。そこでは、事件や政治家の振る舞いをきっかけとしつつも、過剰な献金やカルト対策といった、法律の改善や社会的な救済といった、「出口」を模索するという議論が行われていたと見ていだろう。

統一協会テレビ報道、各社の違い

さて、ワイドショーをはじめ多くの報道番組では、VTR や専門家コメントで前提を共有しつつ、コメンテーターたちが「スタジオで受ける」、すなわちコメンテーターそれぞれの解釈を述べるという形式が主である。そのため、コメンテーターのスタンスなどによっても、議論の「方向づけ」が異なりうる。

では、各局ごとに、報道スタンスの違いはあったのだろうか。報道量の比較はすでに行った通りだが、ここでは、「旧統一教会」関連のコーナーで発言してきた、コメンテーターの比較を行ってみたい。

NHK はそもそもストレートニュースが多い上に、時事問題を解説する際には、自社の解説委員に語らせるという形式が多い。なおかつ、このテーマでコメンテーターを呼ぶ形式の番組を放送すること自体が少なかった。その上で、カルト問題を追いつけたジャーナリストの江川紹子氏、宗教研究者の塚田穂高氏らにコメントを求めていた。フジテレビの場合もまた、報道量が他の主要民放よりも少なかったが、取り上げる際には、レギュラーコメンテーターが主として発言する番組が多かった。例えば他の民放テレビでは二桁の出演回数を維持していた紀藤正樹氏も、フジテレビのみ、3 コーナーでの出演に留まっていた。

目立った特徴があったのは、やはり「ミヤネ屋」を放送していた日本テレビであった。複数の番組に、連日、主要な専門家を招き続けていた。そのため、レギュラーコメンテーターよりも専門家ゲストの方が、登場頻度が多くなるという状態になっていた。

別の方向で目立ったのは、フジテレビである。先に述べたように、NHK やテレビ東京などを除いた主要民放で比べると、フジテレビは圧倒的に、放送時間が少なかった。また、宗教関連のテーマに詳しいゲストをコメンテーターで招くのではなく、レギュラーコメンテーターのみで議論を展開させることが多かった。

もちろん、これらのデータ比較だけで、「番組の質」を比較することはできないことは念押ししておく。

<図4> 「旧統一教会」関連コーナーに出演した解説・コメンテーターの各局比較

	NHK	回数	日本テレビ	回数	TBS	回数	フジテレビ	回数	テレビ朝日	回数
1	伏見周祐	2	紀藤正樹	77	石塚元章	39	柳澤秀夫	12	玉川徹	59
2	江川紹子	1	鈴木エイト	56	田崎史郎	27	住田裕子	8	多田文明	35
3	塚田穂高	1	有田芳生	36	櫻井義秀	25	橋下徹	7	杉村太蔵	22
4	曾我秀弘	1	野村修也	27	紀藤正樹	22	古市憲寿	6	萩谷麻衣子	21
5	小嶋章史	1	橋本五郎	27	伊藤淳夫	21	立岩陽一郎	6	柳澤秀夫	21
6	秋山度	1	小西美穂	25	東国原英夫	19	若狭勝	6	伊藤淳夫	20
7	藤井孝充	1	高岡達之	24	鈴木エイト	16	犬塚浩	5	石原良純	18
8	清水聡	1	ガダルカナルタカ	16	大谷昭宏	15	金子恵美	4	田崎史郎	15
9	清水大志	1	解本村健太郎	11	星浩	13	三浦瑠麗	4	山口真由	14
10	以下、なし	0	田崎史郎	11	バービー	13	河野太郎	3	紀藤正樹	14
11			デープスペクター	11	三雲孝江	12	田村淳	3	渡辺宜嗣	11
12			手嶋龍一	11	鎌田靖	11	宮家邦彦	3	石山アンジュ	11
13			杉山愛	11	古館伊知郎	11	紀藤正樹	3	浜田敬子	10
14			橋下徹	10	金子恵美	11	八代英輝	3	山本志門	9
15			阿部克臣	9	龍崎孝	10	鈴木エイト	3	末延吉正	9
16			山田敏弘	9	水谷隼	10	松山俊行	3	菊間千乃	9
17			清原博	9	山口真由	10	大空幸星	3	徐東輝	9
18			仲正昌樹	9	西田公昭	9	矢沢心	2	安部敏樹	7
19			梅沢富美男	8	鈴木紗理奈	9	パトリックハーラン	2	有田芳生	6
20			吉川美代子	8	高橋みなみ	9	トラウデン直美	2	中野信子	6
21			多田文明	8	ふかわりょう	9	武井壮	2	廣津留すみれ	6
22			櫻井義秀	8	若狭勝	9	尾木直樹	2	デープスペクター	6
23			萱野稔人	7	副島淳	8	木村太郎	2	若新雄純	5
24			岸博幸	7	松本明子	8	鈴木大地	2	同率多数	4
25			おおたわ史絵	7	菊地幸夫	8	同率多数	1	同率多数	3

(単位：コーナー数)

新聞と「2世問題」

では、7月8日から9月8日までの2ヶ月間、メディアは「宗教2世問題」について、どの程度、どのように取り上げたのか。

まずは新聞をみてみよう。「宗教2世」(信仰2世、2世信者との表記含む)というキーワードが出てきた記事は、読売3本、朝日6本、毎日6本、日経が4本、産経が5本となっている。記事数こそ少ないものの、基本的には各紙ともに、対策を打つべき重要な問題として位置付けている点で共通している。

読売新聞は、事件の背景を特集した「凶弾 浮かんだ背景」という記事の中で、宗教二世問題について触れ、横道誠氏へのインタビューも紹介している(8/10)。朝日新聞は、ジャーナリスト江川紹子氏へのインタビュー(7/21)や、西田公昭氏、横道誠氏へのインタビュー(8/3)を扱っている。

毎日新聞は、記者によるルポの中で、横道氏主催の自助グループの活動を紹介(9/6)。日経新聞は、政府方針を伝える記事の中で、短く2世問題に触れるにとどまった。

産経新聞は、書籍紹介のコーナーで、親子問題を論じた書籍を「2世問題」と絡めて紹介。

また、他の記事でも、複数の「宗教2世」の声を紹介している。たとえば産経新聞の「残響 元首相銃撃一ヶ月」(8/6-8/9)という連載ルポでは、「絶対にあってはならない行為だが、2世のだれがそうならもおかしくない」といった具合に、山上容疑者に共感を示す声を複数紹介。「旧統一教会と関係が深い自民党を攻撃する道具として、自分たち被害者が利用されているのでは」といった声も紹介しつつ、「政治家は、きっと票欲しさで関わっていたと思うが、私たち被害者にとっては、置き去りにされたような気持ちにもなる」といった声も紹介している。

それではテレビは、「2世問題」をどの程度報じたのか。

上記期間中に番組として特集された時間は、約6時間(366分)。旧統一教会問題の報道時間と比べると、約3%程度ということになるが、それでも特定のテーマについて各局が特集を相応に取るというのは、これまでになかったことだ。

特集を組んだ番組は限られているので、表にまとめておく。表では、取り上げた番組、特注タイトル、放送日、特集の長さを掲載している。なお、例えば旧統一教会問題を取り上げた番組で、コメンテーターなどが特集趣旨から拡張して、2世問題に触れて発言するようなことも実際には存在する。そのため、「2世問題の特集した番組」ではなく「2世問題に触れた番組」となれば、放送時間はもっと増えることになるだろう。

事件当初は、容疑者が「2世」であることそのものに着目する報道であったが、その後は、事件をきっかけとして知られることとなった、「2世問題」をクローズアップする番組が増えていった。

<図5> 「宗教2世」報道一覧 (2022年7月8日から9月8日まで)

【クローズアップ現代】「旧統一教会と政治・見過ごされてきた関係」(8/29、28.3分)、「旧統一教会”宗教2世”の現実」(9/5、25.2分)、「オープニング」(9/5、1.7分) / ニュースウオッチ9「旧統一教会・宗教2世が証言・国会議員との関わり明らか」(8/8、9.7分) / 【NHKニュースおはよう日本】「安倍晋三元首相銃撃事件の波紋・”宗教2世”知られざる苦悩」(7/27、9.5分) / 時論公論「旧統一教会と「宗教2世」問題」(8/22、9.5分) / 【時論公論(再)】「旧統一教会と「宗教2世」問題」(8/23、9.55分) / ニュース7「旧統一教会めぐり相次ぐ相談」(8/27、2.5分)

【スッキリ】「安倍晋三元首相銃撃事件・男逮捕」(7/14、11分)、「安倍晋三元首相日本銃撃事件・容疑者”事件示唆”手紙」(7/18、10.5分)、「安倍晋三元首相銃撃事件・”統一教会”の被害者弁護士・生出演」(7/15、9.6分)、「世界平和統一家庭連合・田中富広会長・会見」(8/11、28.6分) / 【情報ライブミヤネ屋】「旧統一教会・宗教2世の抱える問題と苦悩」(8/31、41.3分) / 【ズームイン!! サタデー】「安倍晋三元首相

銃撃事件・容疑者の伯父語る”犯行の経緯”(7/16、12.3分)、【news zero】
「自民党議員連盟アンケート・独自入手・教団の選挙応援を希望する項目」(8/16、
4.4分)／【シューイチ】「安倍晋三元首相銃撃事件・銃撃男が恨み”統一教会”とは？」
(7/17、2.7分)

TBS
【ゴゴスマ～GOGO! Smile!～】「旧統一教会と政界とのつながり・安倍晋
三元首相の票振り分けに影響か」(8/4、32.8分)／【サンデーモーニング】「旧統一
教会と自民党」(9/4、9.7分)／【news 23】「立憲民主党会合・旧統一教会の元
二世信者が実態語る(8/23、4.9分)／【TBS NEWS】「立憲民主党会合・旧統一
教会の元二世信者が実態語る(8/24、4.8分)／【Nスタ】「旧統一教会・元信者が立
憲民主党会合に出席」(8/23、4分)／【THE TIME】「旧統一教会・元信者が立
憲民主党会合に出席(8/24、2.4分)／【THE TIME'】「立憲民主党会合・旧統一
教会の元二世信者が実態語る」(8/24、1.7分)

フジ
テレビ
ビ
【Mr. サンデー】「旧統一教会”宗教2世”オフ会・どう支援？日本の課題」(8/14、
14分)

テレビ
朝
日
【羽鳥慎一モーニングショー】「自民党・旧統一教会との関係点検・結果発表を延期
(9/6、23.6分)、「旧統一教会”宗教2世”語る苦悩」(9/6、19.7分)、「ラインナップ
紹介」(9/6、3.4分)／【スーパーJチャンネル】「安倍晋三元首相銃撃事件・男逮捕」
(7/13、10.2分)、「山際大志郎経済再生担当大臣・旧統一教会関連団体のイベントに
参加」(8/23、12.9分)／【報道ステーション】「山際大志郎経済再生担当大臣・旧統
一教会関連団体のイベントに参加(8/23、5.3分)

なお、データ収集期間には含まれなかったものの、Eテレは2021年2月9日の段階で、
「ハートネットTV “神様の子”と呼ばれて～宗教2世 迷いながら生きる～」を放送して
いる。このように、特定期間の比較データだけでは見えてこない、各局・各番組の試みが存
在しているため、その質的な評価や先駆性などもまた、冷静に吟味される必要があることは
付け加えておきたい。

「宗教報道の失われた時代」とは何か？

これまで、安倍氏殺害事件以降の報道動向について見てきたが、それ以前はどうだったの
か。

かねてから、旧統一教会の問題に取り組んできた識者らは、この間の宗教報道について、

「失われた30年」「空白の30年」といった表現を用いて振り返っている。では、実際にはどれくらいの、何についての「空白」がそこにあったのか。過去の報道を調べてみよう。

宗教問題、新聞報道の30年

まずは朝日新聞を新聞報道のサンプルと位置付けた上で、「統一教会」関連のワード（統一教会、統一協会、家庭連合、女性連合、UPF）を調べてみよう。図Fは、朝刊・夕刊合わせた記事数である。おおまかな経年変化を把握するため、5年ごとにまとめてみよう。

<図6>統一教会関連の報道量（朝日新聞）

85-89年	62
90-94年	97
95-99年	59
00-04年	34
05-09年	41
10-14年	18
15年-19年	8
20-22年	253

※2020年、2021年は0件、2022年7月12日までは0件。2022年は、9月8日までの分。

旧統一教会は、80年代、90年代に大きく取り上げられている。2000年代にも何度か取り上げられたが、10年代にはその数が減少していることがわかる。これは、「家庭連合」といったワードを含めても、である。

ただし、その間もさまざまな宗教団体についての報道が行われてきた。旧統一教会関連の報道は減少していたものの、時代ごとに「宗教問題」は存在してきた。では、それらはどのように推移してきたのか。

「宗教+問題」というワードで朝日新聞データベースを検索すると、2022年9月末時点で9603件。「宗教団体+問題」という検索ワードで検索すると、993件の記事がヒットする。今回は後者のみを目視で分類し、おおまかな年表にした。それが図7のとおりである。

<図7>「宗教団体+問題」報道年表

年	件数	主なトピックス
---	----	---------

1985-	117	靖国、藤沢「悪魔払い」バラバラ殺人、韓国集団死、靈感商法、霊石愛好会、
-------	-----	-------------------------------------

1989		靈感商法、坂本弁護士一家失踪、愛媛玉串料訴訟、エホバ輸血問題
1990-1994	96	靖国、オウム、岩手靖国判決、暴対法、公明党連立と創価学会、幸福の科学×フライデー、パワフルコスモメイト
1995-1999	423	オウム、創価学会と選挙特集、破防法、愛媛玉串料訴訟、法の華、自民党総裁選
2000-2004	130	森「神の国」発言、クローン人間、ブッシュ政権、イラク国民会議
2005-2009	61	アレフ、摂理、小泉靖国参拝、靖国宗教票、政教分離議論、高島易断、臓器移植、村上春樹『1Q84』
2010-2014	44	砂川政教分離訴訟、サリン 15 年、靖国参拝、秘密保護法審議
2015-2019	45	サリン 20 年、憲法改正議論
2020-2021	25	トランプ、コロナと宗教団体、映画「星の子」、シリーズ特集記事「宗教の見分け方」、政教分離（護国神社への参列）
2022	33	統一協会

靖国問題、靈感商法、エホバ輸血問題、オウム事件、生命倫理や政教分離。メディアはさまざまな論点で、「宗教問題」「宗教団体問題」を取り上げている。ただ、公明党との連立問題を大きく報じた時期以外は、とりわけ「宗教と政治」に関連するところでは、靖国問題がもっとも注目された論点であり続けたようだ。

多くの場合、「国家からの宗教の自由」は注目されてきたが、より社会権的な、「国家による宗教の自由」はあまり議論されてこなかった。つまり、宗教の名のもとに不幸が再生産される状況に対し、国家的な支援や救済がどう行われるべきかという論点は、社会の課題として残ったままであった。

また、報道件数を見ると、「宗教団体」が問題として取り上げられること事態、00年代に入って減少していた。2022年のメディアイベントが起こるまで、多くの人にとっては潜在的に、「宗教団体の問題は過去のもの」といった意識が共有されていた可能性がある。だからこそ多くの方は、「まだ宗教問題があったのか」といった驚きを持って、ニュースに齧り付いていたのではないだろうか。

宗教問題、テレビ報道の20年

では、テレビ報道についてはどうか。

テレビデータについては、そのメディアの特性上、調査・分析リソースには限界がある。そのため今回は、エム・データが保有しているデータのうち、本調査要件に適したデータの期間である 2007 年以降のものを調査対象とした。その上で、2022 年を基準に 5 年区切りで遡ることとし、2007 年、2012 年、2017 年の同時期(2022 年 7 月 8 日～2022 年 9 月 7 日)のデータを抽出した。

対象期間内に「旧統一教会」について取り上げたのは、2022 年の同時期で、述べ 1,122 番組である。2017 年は 0 番組、2012 年は 17 番組、2007 年は 1 番組のみであった。

その間、テレビは新興宗教についてどの程度取り扱ってきたのか。「オウム真理教系ワード」(オウム真理教、ひかりの輪、地下鉄サリン事件、麻原彰晃、松本智津夫)、「幸福の科学系ワード」(幸福の科学、大川隆法)、創価学会系ワード(創価学会、池田大作)、そして「エホバの証人」とを抽出し、年次推移を比較してみよう。

<図 8>新興宗教関連ワードのテレビ登場推移

	オウム	旧統一系	幸福/大川	創価/池田	エホバ	総計
2007	30	1	1	5	0	37
2012	121	21	0	8	0	150
2017	34	0	7	9	0	50
2022	21	3185	0	18	0	3224
総計	206	3207	8	40	0	3461

(単位：コーナー数)

2012 年までは、日本の新興宗教報道はオウム真理教を中心に行われていたこと。しかし 2017 年段階では、新興宗教報道の全体が、大きく減少していることがわかる。

では、伝統宗教問題についてはどうなのか。そのことを把握するため、伝統宗教系ワードとして、「仏教」「キリスト教」「イスラム教」「神道」といった伝統宗教関連ワード、そして「パワースポット」を取り扱った放送データを振り返ってみた。

<図 9>伝統宗教関連ワードのテレビ登場コーナー数

	キリスト教	神道	仏教	イスラム教	パワースポット	総計
2007	81	0	36	59	8	184
2012	34	1	22	33	26	116

2017	24	0	39	112	27	202
2022	31	6	31	59	48	175
総計	170	7	128	263	109	677

単位：コーナー数

伝統宗教関連ワードを含む番組は、全体としてコンスタントに放送されていることがわかる。つまり、伝統宗教関係のワードが減少していないなかで、新興宗教ワードだけが減少していたのが、2017年頃の状況だったといえる。

なお、「パワースポット」というワードが、年々増加していることは興味深い。「御朱印集め」「パワースポットめぐり」などの、カジュアル化された呪術的なツーリズムは、宗教色を抜いたかたちで浸透している。これは、文化的宗教としての世俗化とも見えるが、他方で宗教教育なきまま、呪術的な観念を浸透させることでもあり、ある意味での「宗教的無防備さ」として、「カルトの付け入る隙」を与える可能性も気になる。その辺りは、広くスピリチュアリズムについての研究を待ちたい。

いずれにしても新興宗教に関する報道は、少なくともこの10年、量的には「空白の時代」であったと言えそう。また、集中的な報道が行われず、社会の注目が集まりきらなかったという意味では、「失われた30年」という表現もまた、質的には誇張とも言えないだろう。

2世報道のこれまで、新聞編

では、2世問題についてはどうだろうか。こちら、朝日新聞のデータベースをサンプルに見てみたが、結果としては、ほとんど取り上げられてこなかったと言えるだろう。それは、「宗教2世」という言葉だけではなく、「信者+子ども」「宗教団体+子ども」といったワードで検索しても同様である。

1988年3月20日、「商売上手はどの神様？ 宗教ビジネス最前線」という記事で、「親の信仰を継ぐ」という意味で「二世」という言葉が用いられている。ただしこの記事では、いわゆる「2世」たちの抑圧に焦点を当てているわけではない。

「二世」という言葉を社会問題として報じた記事で古いものとしては、2003年3月10日の記事、「悩み深い『信者2世』英国人女性が脱会体験を語る」がある。それまでは「二世」という言葉を使わず、しかしいくつかの教団に絡めるしかたで、「信者の子ども」についての議論が行われていた。

80年代には特に、エホバの証人の「輸血拒否事件」が、90年代には特に、オウム真理教の子どもたちの問題が報じられてきている。しかしその後、「二世問題」そのものにフォーカスした記事は少ない。オウム関連の裁判の際に取り上げられたほか、書評コーナーや人生相談コーナーなどには、数回登場している。ただし、2021年には、「にじいろの議」という有識者の寄稿欄にて、上越教育大学大学院の塚田穂高准教授が、『宗教2世』問題 信者だけの話ではない」というコラムを執筆している。

2世報道のこれまで、テレビ編

テレビはどうか。少なくとも調査対象の期間中において、2世系のワード（二世信者、宗教二世、宗教三世、宗教2世、宗教3世）を含んだ放送は一件もなかった。もちろんそれ以外の期間に、二世報道がテレビで行われているのは確認できるため、皆無であったというわけではない。しかしながら、さまざまな宗教問題の中で、子どもの権利の問題が、あまり注目されてこなかったことは推測される。

こうした経緯を考えると、2022年の調査期間中に、「宗教2世」の問題が総計366分放送されたというのは、大きな特徴である。その内容もまた、かつてのエホバの輸血問題やオウム事件のように、個別の団体のみの問題が注目されるのではない。旧統一教会への注目をきっかけに、献金やステルス布教（宗教を伏せた上での勧誘活動など）、そして宗教的虐待などの問題にまで、メディアは議題設定の範囲を広げているのである。

まとめ

調査期間である9月以降、国会が開かれてからは、「宗教2世」の取り上げられ方も大きく変化したように思える。当事者有志らが何度も記者会見を開き、顔出し可能な2世らがメディア上で直接発信する機会も増えた。被害者救済法の審議が行われる一方で、宗教的虐待についての対応などが「宿題」として残っている点なども度々指摘されている。

社会調査支援機構チキラボでも、調査と広報を通じて、「宗教2世」というワードは「旧統一協会」をめぐる議論のみに限定されるものではないことを明らかにし、発信活動をおこなってきた。そのためラボ自身が、メディア上で取り上げられる機会も相応にあった。

メディアでの報道状況を把握することは、「これからの報道」を吟味する上でも重要な営みである。宗教報道を、センセーショナルなものとして消費しないこと。2世問題などへの対処を、一時期のムーブメントとして終わらせるのではなく、社会システムとして対応すべき重要議題として刻み続けること。本調査からは、そのような課題を再認識させられる。

(了)